

## 学習情報・マスコミ文化部会

宮 本 一

(国立日高少年自然の家)

### 1. はじめに

日本生涯教育学会第11回大会の「学習情報・マスコミ文化部会」は、放送教育開発センターの市川昌助教授の「アジア地域における放送利用の公開大学とその類型」と題する発表と、部会企画のパネル討議「日本の青少年をとりまくマスコミ文化」の二部に分けて進められた。

### 2. アジア地域における放送利用の公開大学とその類型

市川助教授の発表は学会の用意した発表要旨収録の他に、当日用に持参された資料を加えて行われた。

1987年に結成された“アジア放送・公開大学連合(AAOU)”に加入の7カ国の大学は次の一覧表のとおりである。

内容は東南アジア地域の開発戦略と放送利用の公開大学の人材養成とその課題を整理し、生涯教育における放送利用の開かれた大学としての類型化が発表された。それによると次の3つの類型がある。

① 生涯教育・放送中心型

日本「放送大学」 中国「電視大学」 インド「インディラ・ガンジー大学」

② 高等教育補充・学習センター型

韓国「韓国放送通信大学」 パキスタン「アラマ・イクバル大学」

③ 高等教育拡充・印刷教材型

タイ「スコタイ・タマティラート大学」 インドネシア「テルブカ大学」

また、東南アジア地域の公開大学は、高等教育の拡充強化のための国家要請として発足したものが多く、地域社会の成人教育機関としての意義は副次的意義にとどまっている。まず第一は、国民経済発展のための人的資本拡充で、特に開発途上国においては高度な技術をもった官僚、教員の養成といった即戦力としての放送利用が優先し、長期的な視野からみた初等教育中等教育の基盤設備、成人の非識字階層の教育一特に農山村の婦人ー及び自動の識字教育などがおくれがちである。しかしインディラ・ガンジー大学やテルブガ大学では、副次的とはいえ公衆衛生、家族計画、コミュニティ・プラン、乳児保育など地域社会における婦人学習の教材提供を行い、生涯教育的意義は大きく、今後の社会開発の役割が期待されるとした。

第二は工場労働者のための基礎的技術教育機関としての意義であり、この姿勢のもっとも明確なのは中国の中央及び各省電視大学であるという。ここは大学入学試験受験資格として高校卒業のほか、2年以上の職歴と工場における職場審査による推薦が義務付けられ、入学者は必要時間の職場離脱が可能なシステムである。50分ずつ午前3コマ午後3コマで16時10分の工場終了までくりかえし放送され、学生は職場の勤務をみながら選択視聴している。卒業まで120週の学習期間となる。前期は機械工学、電子技術、電気修理、・・等の基礎技術、後期が英語、高等数学、計算機物理、数学、無機科学・・等の教育計画であり、発展途上国の人材育成に果す放送大学の意義は大きいと評価できると主張した。

### 3. シンポジウム「日本の青少年をとりまくマスコミ文化」

第二部では上智大学の高桑康雄氏と国立花山少年自然の家の宮本一氏の司会で、日本ルーテル神学大学の櫛田磐氏、お茶の水大学の本田和子氏、上智大学のホセ・M・デベラ (Jose・M・deVera) 氏を登壇者とするシンポジウムが、部会の企画として開催された。

#### A. 第一回目の発言

##### (1) マスコミ文化と環境の問題——総論的に——

日本ルーテル神学大学 櫛田 磐

##### 〈1. 意図と課題〉

##### “① メディア型からメッセージ型の研究へ”

これまでのマスコミや視聴覚教育の研究は、コミュニケーション・メディアを研究対象とすることが主流であったが、文化環境の構成をマスコミが独占するような時代に入り、メッセージ（流されてる情報）について調査や討議を深めることが求められる時代となった。

“② コミュニケーション・メッセージは人々の思考、行動様式及び価値基準の形成、つまりは人格の形成に影響を与える”

このことはこれまでの定説であったが、その因果関係を把握することは至難であり、一つ一つの研究はすべて状況証拠の提示にすぎないかもしれない。しかし、今やこの問題を放置するわけにはいかない。

“③ 文化的なメッセージはその形式・方法ばかりではなく、内容の価値をも論じなければならない”

たとえば現代の代表的な価値基準としては、ア・消費生活に幸福を求める拝金主義、イ・新しいことはよいことだとする伝承の拒否、ウ・表面的格好

良さを求める形式主義，エ．モデル的美形をよしとする皮相的主観，オ．正義のためには暴力をも承認する力への依存感覚，カ．性（セックス）を魅力の極とする欲望是認，キ．古い道徳や宗教をせせら笑う伝統の否定 等が横いつしているが，人々の中にはこれらの風潮に否定的な人も多い。従って善し悪しを論じていてはメッセージの内容の価値を論ずることはできない。「表現・意見の自由」と「マスコミ文化のメッセージ内容の検討」とは時に不毛の論争に陥り，相剋するかもしれないが，だからといって，メッセージ内容の検討をタブーにするべきではない。価値観の相違をのりこえたところで討議を進めたい。

“④ 特に青少年の生活様式や価値観の形成問題に焦点を絞ってマスコミ文化の検討をはじめよう”

印刷物（とくにマンガ，コミック，雑誌）と映像（テレビ，映画，ビデオ）を主として扱いたい。

このように企画担当者として討議の方向性を示したあと，次のような内容を展開した。

## 〈2．文化環境〉

現代は1922年にリップマンが提唱した「マスメディアによって構成される環境は“虚・つくりもの（pseudo）”である」ということは成立しがたくなっているのではないか。つまり，現代はマスメディアによって作られた世界からメッセージが逆流し，人々の生活様式や物品の形式，消費の動向が左右されている時代であり，特に青少年においては甚だしいとみるべきである。

つまり1967年にマクルーハンの提唱した「メディアはメッセージである」との提唱は今や現実のものとなっている。そこで文化環境を捉える方法として，1974年に提唱されたように「一つのメッセージはいつももう一つのメッセージのメディアである」という理論をあてはめ，メッセージの真の意図を捉える方法を考えたい。

## 〈3．現代日本の青少年の文化環境〉

① マンガとテレビは自ら創り出す文化ではなく，提供されたメディア文

化である。日本の青少年は一般にすべてのメディアに自ら触れるのではなく、自分の好みにあった特定のメディアしか選択せず、そのメディアの提供するメッセージを繰り返して受容している。従って送り手の操作しやすい受け手として育っている。

- ② そうした中で、青少年の文化で特に問題とされたのは「暴力と性」であった。受け手が今は「性産業の対象」となり、青少年の間に遊びとしての疑似暴力が教え込まれ、消費のカatalogが浸透しても、なお、この影響について、解決方法をさぐる論議はあまり進んでいない。
- ③ マスコミ文化は、青少年の選択を経てブームを起す。これを分析することによって、青少年の競争社会への批判の方向が読みとれるように思われる。人生の目的観の喪失といわれる世代は次にどんな文化を求めるだろうか。

#### 〈4. 研究方法の課題〉

- ① メッセージの内容分析に必要な共通の基準は確立できるか。
- ② 「何に触れているか」から「何を、どうみているか」へ調査方向を進める。
- ③ 諸外国の先行研究の調査を分析する必要性

#### (2) 青少年文化と生活様式の形式

お茶の水女子大学 本 田 和 子

人間の認識能力は身体の成長段階ごとに五感を通して世界を感受しながら全体感覚を育てるものであって、オーディオ・ビジュアルな世界は子どもの発達を変容させる。それは子どもの認識能力を育てる過程に子どもの肉体の介入を妨げているからである。

このように10年前日本教育学会で発表したのが、その後のエレクトリック機器の発達は予想を上まわることとなった。それは何もテレビだけの問題ではなく、実生活の環境がそうになってきている。つまり、都会では電子画像によるメッセージが大量かつ多様に提示され、エレクトリック環境は大增殖をし

ている反面、非都会ではまだ多くの人間環境が残されている。

非都会時代に育った大人は生身の人間と電子画像の人物映像とを鋭く区別するが、子どもはそうではない。電子映像に移る人物には挨拶は不要であるが、生身の人間の挨拶には挨拶を返さなければならない。しかし、子どもは電子映像と生身の人間とをさほど峻別せず、人に対して無関心で、さらにそれが増殖を続ける。生身の人間には汚さがあるが電子映像は清潔であり、透明感をもつ。そうした中で育つ子どもは、機械と手を結ぶのが上手であり、今や、ストレス解消においてすら、爆発もせず、上手にエレクトリック・メディアによって解消させてしまっている。

こうして今や、その身体像ですらも、輪郭の中に閉じこめられず、輪郭の鮮明でない人たちが生まれてきている。こうした人たちは、機械に上手になじむ人間であり、機械と同じような人間、機械と共存できる人間となりつつある。これをどう考え、彼らとどう関係を結ぶかが、今後の課題であろう。

### (3) メッセージと価値観の形式 ～日本のマスコミ文化の特徴～

上智大学 ホセ・M・デベラ

個人が物事に対する価値観を獲得することができるよう導くことは教育の目指す一つの基本であり、教育によって一定の価値観を持ちえた個人は、成人となって様々な人生体験に出会ったとき、それを直視し、理解し、更には自分なりの判断をもつことができる。

社会の変化がゆっくりとしたペースで進んでいた伝統社会では、子ども時代に獲得された価値観は、成人して人生の経験が深められた後も、なおその個人の生涯を通じて有効性を失うことがなかった。また、それらの価値観は家族、学校、仲間との接触によって、また宗教が生活の中で生きている社会においては宗教を通して育てられていった。

しかし、絶え間のない変化にさらされる社会においては、社会にとっても個人にとっても、新しい予期しえなかった状況が生まれ、子ども時代に獲得された価値観によってはおよそ判断のつかない問題が多く生じてくる。そう

した社会にあって、テレビは人に情報を提供するのみならず、発生した新事態に対する判断の基準まで示すことになる。しかもこの重要な機能を教育番組ばかりでなく、娯楽番組の中でも果たしている。

一般に技術革新は一つの世界観を定着させるようだ。印刷技術が生まれて後民主主義が生まれ定着した。印刷技術のない時代のアテネの民主主義は往々にしてゆがみを招いた。それは知識とインフォメーションの不足に起因する。今や印刷技術をさらに上まわるコンピュータや核の時代である。ここからどんな革命的世界観が生まれるだろうか。

特別な事例として、メッセージの前にメディアそのものの影響の例を話したい。0～1才の乳幼児は平均1時間04分テレビの前にいるという。彼等はテレビのメッセージの内容はわからないはずであるが、影響がないとはいえない。テレビの前にいるときの脳波に $\beta$ 波が出てくるが、すぐ $\alpha$ 波に戻る。これは、メッセージが消化できず混乱していることを示す。 $\beta$ 波の出現の原因はテレビの前にいるというメディアの影響とみられる。子どもが番組の本編とコマーシャルの区別ができるのは4才頃からといわれる。

別の例として、今の子どもたちは「死」というものをどう捉えているだろうか。昨夜画面で死んだ俳優が今朝元気にしゃべっているのを不思議と知らない状況にある。一般に15才までに人は平均一人の肉親の死に出合うが、テレビのメッセージの中では15年間に15,000人の殺人を目撃しているという。おそらく子どもにとって「死」というものの認識は大人とはちがうのではないかということは想像がつく。

## B. 第二回目の発言

ひとめぐり発言を終わったところで司会から補足等をうながす発言があった。

(櫛田氏) 自分と両氏の話に共通に感ずることは、リアルとエレクトロメディアのメッセージとの区別は、年齢の低いほど一体化すること、子どもた

ちの選択力は無意識の中に育つようであること、鉄腕アトム離れもだれかの指導によるものではなかったこと、などが挙げられる。

(本田氏) 子どもにとってメディアの氾濫の中で成長する中で、一体、何が虚で何が実なのだろうか。大人にとっての虚は子どもにとっては虚でないかもしれない。虚と実が成立しない世代だとするならば、虚と実を分化させながら生活する大人との間に、どうコミュニケーションをつけるかが課題となる。

今の若者はそのエネルギーが爆発の機会を持たずに、別の回路で発散しているようで、熱いエネルギーをかかえるのでなく冷たいエネルギーを蓄えているようだ。

二極化現象にふれておきたい。若者はセックスはするが生殖はしたくないと考え、そこからセックスを拒否し動物より植物的な方向に動く者とそうでないものの二極化現象がみられる。女性マンガ——たとえばレディスコミック——にも従来現われなかったセックス描写があるかと思うと清潔さを売りものにするマンガ——たとえば「となりのトトロ」——のようなものと人気を二分している。

## C. フロアの参加者との質疑応答

(1) 亜細亜大学の平沢氏から「メッセージの評価基準の問題」を各氏に質問があった。

(櫛田氏) これはこれからの課題であるとのみ述べるにとどめたいが、性や暴力を例に次のようにまとめられる。価値観の形成ずみの人々の間ではこの問題は討議にはなるが必ず是非論に陥り、話のかみあう場がないのがこれまでの状態であった。これをさける討議のあり方をまず研究する必要がある。

(本田氏) 基準というものはある時代を背負った人たちの中に生まれるものであり、今のような変化の激しい時代は基準の生まれにくい時代である。しかし、基準を示すのは大人でなければならない。



(デベラ氏) 基準というのは検閲を招くので、作ることに問題はあり、また作れないのではないか。ただ国民運動として製作者に圧力をかけるということは可能である。

この問題に関連して放送教育開発センターの市川氏が発言を求め、司会はこれを許可した。

(市川氏) 暴力を例にとり、視聴の場の構造による変化がどのような影響を与えるかは未開拓の問題であるけれども、欧米諸国の例として、きびしい制約のあることを示したい。たとえば「犯罪の手口はみせない」という場面では非常にきびしい制約がある。しかし反面「性」についてはかなりゆるやかになりつつある。なお、視聴の場の構造による変化とは、リビング・ルームと子ども部屋との差、みんなで見るのとひとりで見ることの差、兄弟で見るのとひとりっ子の場合の差など、科学的な研究の必要性があげられる。

(櫛田氏) 性的なものの検閲の歴史を考えると、諸外国との規制の違いがある。日本では裏文化あったものが表文化になるような傾向が見られるが、これでは、野ばなしではないか。

(2) 平沢氏 子どもに対するマスメディアへの接し方の確立が今後の問題という立場からメディア教育、マスコミ教育の在り方を各氏に問われた。

(櫛田氏) 青少年のように価値観の未形成の場合は、価値観の成長のプロセスを示して、その成長を待つほかに、幼児などでは母親とか保育者というフィルターが必要である。

(本田氏) 幼児は料理番組が好きということがいわれているが、これは母親が熱中してみるという態度の影響であると思うが、ここにマスメディアへの接し方の一端が示されているように思う。

(デベラ氏) これは家庭教育の問題で、簡明直截に次のように考えられる。3才まではテレビの前で遊ばせるな。3才以後は一緒に見て簡単な説明を加えよ。コマーシャルをみてほしがっても、もっている代わりのものを示して安心させてやることでほしがらないようにさせるべきである。

このあと、一参加者（拓殖大学）は学校教育の立場から、「マスコミの非教育的情報たれ流しがなぜ許されるのか」に憤りの声を出された。文部省（文化庁）が“美しい日本語を使いましょう”と一生懸命に努力しているが、テレビやラジオで無茶苦茶な日本語の使用が幅をきかし、しかもその責任を問えないシステムが日本にはある。更に、食物を大切にするという美徳があるにもかかわらず、番組の中で食物を食物として扱わないものすら人気を博している。どうしてこんなたれ流しのマスコミの存在が許されるのか。検閲などの古い苦い過去に戻らないために、これからはマスコミに対する「マスコミの人間学」が必要ではないか。

ほぼこのあたりで予定の時間となり、司会から「日本人をとりまくマスコミ文化の諸問題が語られ、これからの研究の方向がみえるのではないか」というまとめで終了した。